

Title	Babylonian life and history, by Sir E. A. W Budge, London, Second Edition, 1925, 8Vo., XXii 296 pp.
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.3 (1928. 11) ,p.149(461)- 150(462)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281100-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

目的とするものである。本協會は夙に一八四八年エジプト及びアツシリヤに於て行はれた發掘に注目し、それが聖書の研究及びその正しき理會に極めて大切なることを認め、所謂古代東邦に關してそれ等の事業と研究とを簡明に記述し、至廉なる月刊六片本として一般公衆に提供し、大に學界と斯學の知識普及に寄與したのであつたが、その後エジプトのオベリスクがロンドンに移されたると一八八三年に於ける英軍のエジプト占領とはエジプト及び近東方面に關する同國公衆の興味を再燃せしめたので、本協會は是等に關しての新著編輯の好時機であるとして、上記叢書の初刊以來經過したる三十年間に於ける斯學の進歩に副ふべく、一八八四年に刊行したる *By-Paths of Bible Knowledge* と稱する叢書は多大の歡迎を受け、爾來數版を重ねたのであるが、世界大戦中にその製版等が軍用に徵發せられたので、爰に新叢書を刊行するの必要に迫られ、斯くして本書は全部書換へられて新著として世に出づるに至つたものである。

本書の内容を見るに、第一章に於てエジプトのオベリスクに關する一切の事項を網羅し、第二章に於てクレオパトラの針がロンドンに移植せられた經過（その大要は三田評論本年七月號の拙稿にあり）を記し、第三章に於てはエジプトのオベリスクの解説を試み、埃及聖字を以て記されたるその碑文の原文と對譯とを掲げ、世界各地に散布せる重要オベリスクの現存地及び容積重量等をも表示し（二七二—四頁）且つアビシニヤの「オベリスク」についても記述し、卷末には參考書目を掲げてある。

斯くして本書は上古の石造記念物の一としてピラミットと共に

エジプト特有なるオベリスクの研究をなすのに頗る完備したる其入門書である。著者バツヤ氏は多年發掘及び大英博物館に於ける斯界の權威であつてフリンダーズ・ペトリ教授の哲學的思索に秀でたるに對して、彼は考證の點に於て優つてゐる。たゞしオベリスクをクレオパトラの針と呼ぶに至つた理由を説明して第十二世紀末にアラビヤ人なる醫師アブダル・ラチフが之を *Mesella* といふ。即ち「埃及王の大針」といひ、又地理學者のヤクトも土人が一般に是等と同じ意味で *Mesella Firda* といつたと記し、アラビヤ語のミザラーといふのは「大針」を意味するのだが、それに附してある附號は卑俗の用法なのである。故に下俗の間では針が男である玉の持物とするのは可笑しいといふので女王のものとされ、それに之がクレオパトラの名と不可分の關係を持つに至つたアレクサンドリヤ市に建てられてゐた處から、（且つは陽物崇拜の下品な意味も加はつて）、女王のものとなされるに至つたのであらうとて、歴史的にはクレオパトラとは何等の關係もないことを記し（十八頁）乍ら後の部分に於てアブダル・ラチフがこれらな「クレオパトラの大針」と記したと矛盾せる記載をなして（百六十六頁）ゐるのは、正確を以て聞ゆるバツヤ氏の記事としては、聊か變である。（岡崎万里）

Babylonian Life and History, by Sir E. A. W. Budge, London, Second Edition, 1925. 8Vo. XXII 296 pp.

本書は、上記の前書と同一の理由により改訂再版せられたもので表題の外は全く新著と看做すべきであつて、一般にバビロニヤ研究の趣味を鼓吹するのに良い本である。たゞバビロニヤの洪水傳説その他がバイアルの中に取入れられたことは今や多くの學者の承認する處であるのに、キリスト教のために極力辯護を加へてゐるのは、どうてあらうかと思はれる節ではあるが、本書發行の動機からして已を得ないのであるかも知れない。その内容は次の如くである。

- 一、バビロニヤとユーフラテス・チクリス河地方。二、バビロニヤの紀年と歴史。三、バビロン市。四、バビロニヤの創造物語。五、シルガミツシユの史詩に記せる洪水物語。六、バビロニヤの宗教上の信仰。七、ハンムラビの法典。八、バビロニヤの宗教的藝術的文獻傳説等。九、バビロニヤの王とその人民並に彼等の生活。十、バビロニヤの文字と學問。十一、バビロニヤに於ける大英博物館の發掘。十二、バビロンに近きキシ市の發掘。(間崎万里)

彙 報

鹿島香取地方見學旅行記

去る六月二日三日の二日間に亘りて史學科春季見學旅行を鹿島香取方面に行ひ、鹿島香取兩神宮及び佐原町牧野彌福寺、伊能家、清宮家等に就きて見學す。一行は教授、先輩、學生合せて十五人なりき。

六月二日(土曜日、雨天) 午前六時二十五分上野驛發水戸行の汽車に乗り、同八時五十三分石岡驛に下車して鹿島香宮鐵道會社線に乗換へ、同九時三十二分濱驛に着す。直ちに同會社汽船香宮丸に乗り、九時五十分同所發、霞ヶ浦を南下して鹿島に向ふ。航行二時間半の間、細雨いたづらに烟りて湖上の展望を得ざりしは遺憾なりき。零時半、北浦の東岸大船津に上陸し、同所にて中食を認め、一時四十分自動車にて官幣大鹿島神宮に詣づ。自動車を大鳥居前に捨て、大鳥居、樓門を過ぎて本殿に參拜し、社務所に到る。折柄、岡宮司不在にて禰宜吉川國男氏、主典吉川燦一郎氏等應接せられ、直ちに境内の假寶物陳列所に於て寶物類を拜觀す。後一條天皇長元七年、中宮藤原成子御祈願として當社へ納められたる二十四顆の白玉、古くより世上の問題となれる懸鐘等をはじめ、建久二年源賴朝奉納鞍骨、元和五年源家光奉納鞍骨及び鐘等、貴重なるもの多し。